

窓に咲く

高島清子

あの窓のカーテンが少し開いて
その顔が今日も外を見ているから
大きく手を振って応えるのが私のやり方だった
するとカーテンは閉まり顔は消える

わたしは遠くから近づきながらもあの窓を見る
今日も顔が咲いているかと
もてあます時間を外を見て暮らす人の明日からを思えば
私はその孤独を少しは思うこともある
カーテンの後ろに隠れる稚拙な含羞も悲しいものだ

あの窓のカーテンとレースの間に咲くのは顔
私はあの顔に向かって大きく手を振る無意味さに気づく
そのように咲けば良い黒い影よ
その人は一步も歩けないのかも知れず
部屋に籠って安らかに暮らす人か

今日もバスを待つ間あの窓を見た
ここは恥ずかしがり屋の町だから
ここは北関東の純情県民の町だから

平野に立つマンションの窓々のカーテンの隙間に
顔が咲く顔が咲いた咲いている
手を振れば顔は慌てふためいて隠れてしまう
私にも不思議な意地が芽生えて
無意味な癖が楽しみへと変わり始める